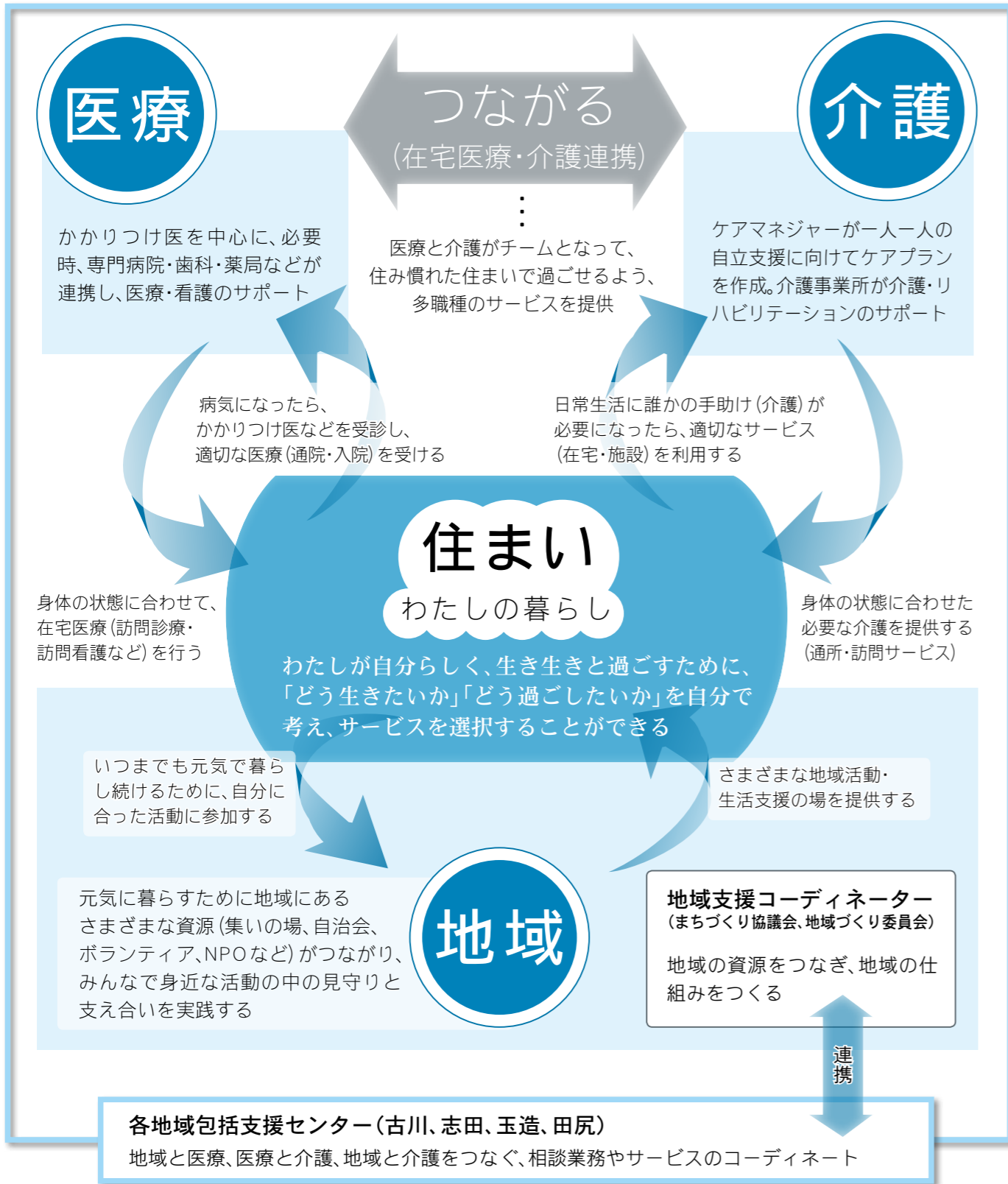


いつまでも生き生きと、住み慣れた地域で暮らす

# 大崎市流地域包括ケアシステム

大崎市流地域包括ケアシステムは「健康づくり」「自立支援」「地域づくり」が三本柱。慣れ親しんだ住まいに暮らす「わたし」を、地域・医療・介護が一体となって「みんなで支え合う」仕組みです。



## 自分たちができること

話し合いを大切に、みんなが協力して進めるのが、大崎市流のまちづくり。地域の実情に合わせて地域が主体となって取り組んだ、一つの成功事例を紹介します。

▶自分たちできれいにしている沿道の花壇を前に、堀さん、大江さん、柿澤さん(右から)。



鳴子温泉地域の上野々地区は、潟沼や上野々スキー場などがある観光地で、約100世帯、240人が生活しています。

町内会の副会長を務める大江清輝さん、いきいき百歳体操のリーダーの柿澤真里子さん、堀範子さんに話を聞きました。

上野々地区には商店が無いため、買い物に不便なことが地域課題の一つとなっていました。大江さんは地域のつなぎ役として、地域支援コーディネーターの高橋さんと話し合いを重ね、7月から移動販売車が週に1度、上野々地区に来ています。

しかし、買い物だけに足を運ぶ人がどれだけのいるのか。そう感じた大江さんは、以前からいきいき百歳体操の実施を望む声があったことから、移動販売車の出張日に合わせて百歳体操に取り組めるよう調整を行ったそうです。

柿澤さんと堀さんは、週に一度の集まりを楽しみにしています。百歳体操と終わった

後のお茶のみ、移動販売車での買い物など、以前より交流が深まりました。

「移動販売車は種類や品数に限りがあるけれど、自分の目で見て選ぶことが楽しみの一つです」と堀さんは話します。品物が売り切れると、みんなで分け合う「おすそ分け」が、支え合いの一つになっています。

「昔は子ども会や盆踊りなど、地域住民同士の付き合いがありました。それが次第に薄れてきた時、いいタイミングで新たな取り組みができたと思う。昨年、地域住民でワークショップ(話し合い)を行ったが、実は、地域住民の人たちは集まる場所やきっかけを求めているのではないかと大江さんは振り返ります。「組織の代表になると重荷になるので誰も受け手がなくなると。それが悪循環になっていった。何かをやるうとする人たちが集まって、楽しくやれば長く続け、次第に人が集まってくるものだと思う」

「話し合いの中で地域資源を活用していくこうとする場面ができていた」「自分たちがやれること、やれないことを整理し、上野々地区は実現することができた」と話してくれました。

## 地域の医療・介護の専門職とともにつくる 在宅医療・介護連携推進事業



▲在宅医療・介護連携支援センタースタッフの深沼さん(右)と伊藤さん(左)

**医療** 療と介護の両方を必要とする高齢者が、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けるためには、地域における医療・介護の関係機関が連携し、包括的かつ継続的な在宅医療・介護の提供が必要です。関係機関が連携し、多職種協働による在宅医療・介護を一体的に提供できる体制を構築するため、市と大崎市医師会が中心となって取り組んでいます。

この事業では、在宅医療・介護連携の課題抽出と対応策の検討を行う、大崎市地域包括ケア推進懇談会や、住民の集いの場で講演会を開催するなど普及啓発を行っています。

地域包括ケア推進懇談会の話し合いから、市が大崎市医師会に委託し、大崎市在宅医療・介護連携支援センターが古川駅前大通(大崎市医師会訪問看護ステーション1階)に設置されました。在宅医療・介護に関する相談窓口や、地域へ訪問して健康講話などを行っています。